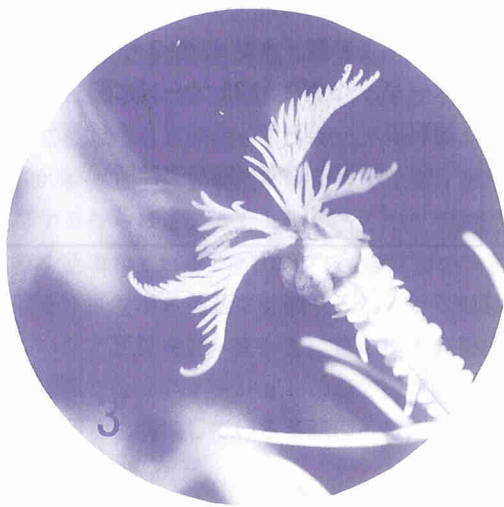
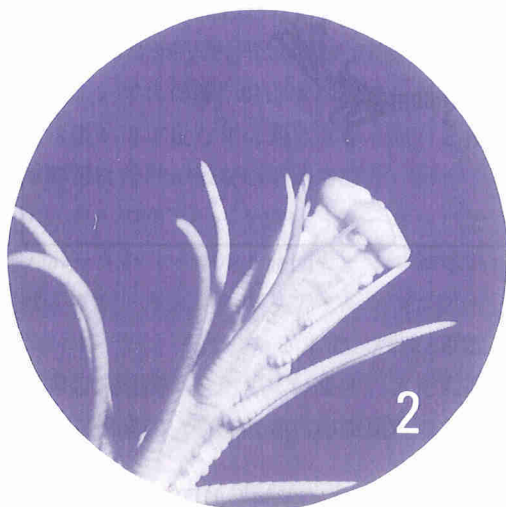


東京大学理学部

廣報



表紙の説明

水槽飼育されたウミユリ

相模湾、駿河湾などの日本列島太平洋岸の水深 100—150 メートルの海底に生息する有柄ウミユリの 1 種「トリノアシ」は、茎部（図参照）に生えた巻枝で岩石などにかからみついて、ユリのように海底に立っている。この動物は、とりわけ強い底層流（水流）の生じる場所に好んで集まることが知られている。写真 1 は、一定方向に水流が生じるように作られた水槽中で飼育された「トリノアシ」で、自然の海底におけるのと同じように立ち、冠部の花びら（腕と呼ばれる）をパラボラアンテナのようにひろげている。この時、風（水流）は、写真の右から左（左から右ではない）に向かって吹いている。

「トリノアシ」は、飼育中にストレスが加わると、しばしば、自ら冠部を落とし（これを自切という）、茎部のみとなる（写真 2）。また、カミソリで冠部を実験的に切り落とすことも出来る。いずれの場合でも、茎部の頂上から冠部の再生が始まり、数カ月で完全な冠部が形成される（写真 3）。冠部の再生は、きわめて再現性が良いから、再生途中の遺伝子発現の研究には好個の材料を提供する。また、ウミユリ類は大量の化石を産するので、化石遺伝子を視野に入れた研究が可能である。（研究ニュース参照。本誌 22 巻 2 号 14 ページ、22 巻 4 号 33 ページに関連記事）

雨宮 昭南（臨海実験所）

